

たきのえいじ

歌
秋
冬



▲千葉テレビ「Jソングアワー～あの人の歌が聞こえる～」(毎週月曜日/午前8時30分～9時)の番組内コーナー「たきのえいじ音楽館」

3月から千葉テレビの「Jソングアワー」という番組で、「たきのえいじ音楽館」というコーナーを月1回やらせて頂き、5月で3回目を迎えた。どんな風に続けていくかは、今後の展開次第だが、なにしろ初めてのテレビでのトーク番組。歌の審査と違い、私の生演奏での歌コーナー

あり、ゲストを迎えるの話ありで、なかなか大変である。なお、アシスタントとして、かとうれい子が一緒に番組を務めてくれる事になった。「たきのさんの自由にも関わっていいですよ。話も進行も」。中山ディレクターは簡単にそうおっしゃって、なんだか判らぬまま番組を引き受けてしまったのが去年の暮れ。「自由にか、なるほど、それもいいか」。何も考えず、2月、第1回目の収録の為、千葉テレビに行つた。かとうも私も特別緊張しているでもなく、控室で出番を待っている。ディレクターから台本が届くものと思つて待つている。「台本が来ないね。かとうくん、何か考えてる、話す事」「はい、何もそんなには考えてません」「あつそう。僕も特に何も考えず来たけど……しかし、中山さん遅いね」1時間ほどして、スタッフが呼び

に来た。「かとうくん、呼びにきたよ。まあ、行つてみつか」と云つてスタジオに入る。「スタッフのみなさん、新コーナーのたきのさんとかとうさんです。よろしくね」とディレクターに紹介される。

「さて、中山さん。どんな風にやるの?」先生、自由で良いですよ。いつもの様に」と云われたつて、いつもの様である。つまり、1回もやつていないのである。ディレクターは少しも慌てず「そうですね、全てが突然始まり、余計な余韻をつけず次の画面に切り替わる……とまあ、そんな構成を考えてまして……はい」。

何が、はい。だ。忍者映画じゃあるまいし、何が次の場面だと? こちらはズブの素人である。「ではこうしましょう。かとうさんの歌から収録しましょう。『純情』はカラオケで、そして『さくら』は先生のギターで参りましょう」。判り易い。これは何の問題もない。ほんの10分で終了。

さて問題は、話のコーナーである。好きな事を喋ると言つても、1時間ある訳じゃなくテーマを絞らねばなるまい。1回目のゲストはアシス

タントでもある、かとうれい子自身。歌の真髓の話でも。さてさて、と云つてかとうの顔を見た。いくら蟻や深海魚が好きだと云つても、歌を深め極める話は、かとうくんとして大変だ。つまり、エピソードの持つていき方である。ここで人生を語るのもどこか場違いであり、万葉集や、楽器の出現と発展もなかなか堅い。そうだ、息の話にしよう。という事で、息の使い方と童謡の話をしたワケである。

そんな、どさくさの中の収録であったが、後日、編集を終えたビデオを観て驚いた。緊張はしているものの、素晴らしい出来であった。あの収録の時の不思議な空気が嘘のように。それなりに、それなりに……。



たきのえいじ

本名・滝野英治

1949年8月31日、愛媛県大洲市生まれ。作詩・作曲の両分野で活躍中。演歌謡曲にあつては主に作詞家としての活動が目立ち、五代夏子、田川寿美、石原詢子他に数多くの作品を提供している。